

中国雲南省における少数民族文化のダイナミズムに関する基礎的研究

—ツーリズムの中の白(ペー)族文化とタイ族文化—

片山 怜

1. はじめに

私は、国際文化学部の授業（比較文化論、文化人類学など）で、グローバリゼーションやトランスナショナルリズムの時代における少数民族文化のダイナミズムについて学ぶ中で、特に、エスニック・ツーリズム（民族観光）における少数民族文化の変容・再生の動きや文化表象の問題に関心を持つようになった。約 13 億人の人口を抱える中国には 55 もの少数民族が存在するが、中でも、26 もの少数民族が暮らす雲南省は「少数民族の宝庫」であり、また彼らを対象とするツーリズム（観光）が盛んなことから、雲南省を研究対象地とすることにした。そして特に、①大理白族（ペー族）自治州と西双版纳タイ族自治州に住む、白族（ペー族）とタイ族の文化表象が、観光客に対してどのように提示されているのか、②ホスト社会（白族、タイ族）とゲスト社会（観光客）の間にはどのような相互のダイナミズムがあるのか、というテーマを設定して研究旅行を実施した。

2. 研究旅行の日程～昆明・大理・西双版纳～

9月13日	福岡発→MU532 便→上海（浦東）着→バスで移動→上海（虹橋）発→MU5818 便→昆明着
9月14日	昆明市の「雲南民族博物館」、「雲南民族村」を見学した（「雲南省における少数民族文化とツーリズム」の概況を把握するとともに、少数民族文化がどのように表象され、観光客に提示されているかを観察した）
9月15日	「円通禅寺」、「雲南師範大学」、「雲南大学」などを見学した（昆明のすべて徒歩で移動し、雲南の町並みや人間を観察し、画像資料の収集を行う。）
9月16日	昆明発→CZ3481 便→大理 「大理白(ペー)族自治州博物館」を訪問（白族文化が観光客にどのように提示されているかを観察した）
9月17日	大理市北部の大理古城を散策し、白族文化が観光客にどのように提示されているかを観察した。」また、古城内の「大理市博物館」を訪問・見学した。
9月18日	「周城の白(ペー)族村落」、「喜洲の白(ペー)族村落」を訪問し、白族文化が観光客にどのように提示されているのかを観察した）
9月19日	「大理駅」、「洱海公園」を訪問した。 大理発→8L9962→景洪（西双版纳）着

9月20日	景洪（西双版纳）→（バス）→勐海→（小型バス）→景真村 タイ族の景真村と景真寺を訪問し、景真寺ではタイ族僧侶に聞き取り調査を実施した。また、勐海では、タイ族の生活を見学した。
9月21日	景洪（西双版纳）→（バス）→ガンランパー地区 「西双版纳タイ族園」を訪問した（タイ族の文化が観光客に対してどのように提示されているかについて観察した）
9月22日	景洪（西双版纳）市内の「民族風情園」、「曼听公園」を訪問した（景洪において、少数民族文化がどのように提示されているかを観察した） 景洪発→8L9979 便→昆明着
9月23日	昆明発→MU5805 便→上海（虹橋）着→バスで移動→上海（浦東）発→MU531 便→福岡着

3. 雲南省の少数民族文化の概要を探る～雲南省昆明市～

雲南省に住む少数民族文化の概要を知るために、「雲南民族博物館」と「雲南民族文化村」を訪れた。

◆雲南民族博物館

雲南民族博物館は、昆明市内の西南方向約8kmの郊外に位置している。ここは、<民族民間面具><民族民間瓦当><伝統生産生活技術><民間美術><民間美術><民族楽器>の部門ごとに、雲南省に居住する少数民族文化が展示されていた。

*民族民間面具

雲南省に住む様々な少数民族の使う面具が展示してあり、どのような民族が、どういった場面で使用しているお面なのかが、日本語も含めて丁寧に説明してあった。特に、ヤオ族、チワン族、ジノー族、イ族、白（ペー）族、タイ族、シュイ族といった少数民族と、漢族のものが目だっていた。宗教活動や婚礼・葬式など彼らの生活や人生にとっての重要な節目に魔除けとして使用されるもの、祭日祝いに化粧手段として神や人々を楽しませる役割を担うもの、演劇用にある民族の役を演ずるときに使用するもの、鎮宅用に魔除けや除災をするために玄関や屋根に設置されるものなど様々であった。



*民族民間瓦当

雲南省の民族が民家の屋根に使用している様々な模様の瓦当が展示してあった。動物紋瓦当、植物紋瓦当、文字瓦当、文字紋瓦当、その他紋飾瓦当などである。また、この

瓦当の展示室にある前書きなどは日本語訳と英語訳の表示もあった。

*伝統生産生活技術

雲南省の各民族の伝統的な生産生活技術として、生活する上でどのような道具を用いていたのかを、多くの展示物によって明確に示してあった。採集漁獵、焼畑耕作、漁撈、鋤耕、犁耕、狩、運送、貯蔵などといった生活の上で行われることに、伝統的な道具を用いており、ひとつの事柄に対しての道具はそれぞれ似通ってはいたものの、民族によってやはり異なっていた。また、雲南省に住む民族の民家の模型や生活する上でよく使っていた雑貨などが多数展示されており、製陶技術や製紙技術、搾油技術の様子も展示してあった。ここも、英語訳と日本語訳の説明書きがあった。

*民間美術陳列

刺繍工芸をはじめ、判子の彫り物、切り紙細工、故事図画、画牌祭図など雲南省の民族による美術が展示されていた。刺繍では、回族とタイ族が有名らしく、他の民族のものではなかった。特にタイ族の刺繍は多く展示され、その模様には象や僧侶、寺院などタイ族文化を表象するものが多くみられた。また、この時点で気づいたことは、説明書きに英語訳も日本語訳もなく、中国語でのみ表示されていたという点である。このことは、最初の方では、外国からの観光客が来ても分かるように日本語訳の説明書きがあるが、後の方になってくるにつれて、英語訳や日本語の訳はなく、こうしたことが観光客への文化の提示と関係があるのかもしれないという問題意識をもつきっかけとなった。

*民族楽器陳列

雲南省に住む民族が昔から現代にかけて用いてきた楽器が展示されていた。吹奏楽器、拉奏楽器、弾奏楽器、击奏楽器など種類は豊富で、祭りや特別な行事の時に用いられていたという。また、イ族なら弾奏楽器といったように、それぞれ民族によって得意な楽器があるようだった。

◆雲南民族村

雲南民族村は、先述の雲南民族博物館の向かい側に位置しており、雲南省に居住する少数民族の文化や風俗、民家などが紹介されていた。広大な敷地の中に、各民族のエリアがあり、そこがひとつの村のような造りになっている。それぞれのエリアには、各民族の伝統的住居や象徴が展示されており、住居の中には民具や衣装などが展示されていた。ガイドブック（『地球の歩き方』（2006～7年版））によれば、ここには15の民族エリアがあるとあったが、実際に行って数えてみると、25の少数民族エリアに拡大されており、さらに、現在建設中であった漢民族の村まで含め、雲南省に居住するすべての民族を網羅する方向に進んでいることが推測された。ここを訪れる観光客のほとんどは中国の漢民族で、あとは西洋人が少しいるだけで、日本人には1人も会わなかった。

民族村の各所には、少数民族の伝統衣装を着て写真を撮るといったものがあり、値段はほぼ一律で、5元（日本円では約80円）であった。また、タイ族のエリアのように、

民族衣装を着て象に乗って写真を撮るといったもの(10元=日本円で約160円)もあり、当該民族の文化表象を観光に利用している戦略がみてとれた。



民族衣装を着て写真を撮っている中国人観光客↑



民族衣装を着て象に乗り写真撮影している中国人観光客↑

雲南民族村はテーマパーク化していて、各民族が実際の生活を見せているのではなく、観光客を楽しませるために、民族舞踊ショーや写真撮影、土産物屋などに力を入れている。観光人類学などでいうところのオーセンティシティ(本物志向)はみられず、本当に自分たちの文化や生活様式を見せる気があるのだろうかと思った。また、各民族の人々は、それぞれ自分たちの民族衣装を着て案内などをしていたが、観光客に対しては、あまり自分たちの文化を見せようとしている人は少なく、ひどい場合には家の中で寝ていたりして、やる気がないように見えた。民族によってはにぎやかで派手なパフォーマンスをしているところもあった。これは、タイ族、ワ族、白族、チベット族、トールン族などにみられる傾向であった。



タイ族の水かけ祭り↑



ワ族の民族ショー↑

◆昆明市を歩く

昆明市を歩いて、町並みを見てみた。私が当初想像していたのとはまるで違っており、ビルやデパートなどの高層建築が建ち並び、とても発展していた。アメリカ資本のマクドナルドハンバーガーやケンタッキーフライドチキンをはじめ、日本の味千ラーメンや上島コーヒーがあったり、フランスの巨大スーパー・カルフルなどもあり、雲南省の省都のグローバル化に大きな驚きを感じた。



マクドナルドハンバーガー（米）↑



カルフルー（仏）↑



味千ラーメン（日本）↑



ケンタッキーフライドチキン（米）↑

一方、中国国内で最も多くの少数民族の住む雲南省の省都昆明市内では、やはり、少数民族の衣装を着た人も数多く見受けられた。ただ、下左写真の白族の帽子をかぶった少女はさすがに珍しく、民族衣装を着て町に出ている人は、40歳代より上の年代の中高年の女性たちばかりであり、次に多かったのは小学生くらいの子どもであった。少数民族の衣装を身にまとった男性は、特定の民族のみに見られた。

中国国内で最も多い人口を占める漢民族と少数民族とでは、顔つきや顔の色が全く異なっていた。民族衣装を着ていなくても、一目見ただけで少数民族だとわかるくらいであった。また、ホテル内などのフロントなど表で働く人は漢民族が多く、部屋を掃除する人など、あまり表立った仕事でない人は少数民族が多かった。このことは、中国社会における民族間の格差を感じさせるものといえよう。



白族の帽子のみかぶった少女↑ 少数民族のお婆さん↑ 少数民族のお爺さん↑ 少数民族のお婆さん↑

◆円通禅寺

南詔国の異牟尋王の時代（中国王朝では唐朝時代）に創建された寺院で、円通山の麓にあり、1200年以上の歴史を誇る古刹であるこの円通禅寺は、造りが奈良の唐招提寺によく似ているという印象だった。時期がちょうど唐招提寺が建てられた時と重なっているため興味深かった。この寺院に参拝に訪れる人々は、観光客というよりも地元の人が多いようだった。円通禅寺のトイレはとても汚く、扉もなければ紙もない。初めは、用の足し方さえ分からず戸惑ったが、見よう見まねでその場を乗り切った。観光化された場所であれば、綺麗なトイレが設置されているはずであるが、前述のとおり、とても汚かったため、ここはまだまだ外国人観光客に対して観光化されている場所とは言い難いという印象を抱いた。



円通禅寺の正門↑



円通禅寺内のトイレ↑

4. 白族（ペー族）の町を歩く～大理市と周辺農村～

昆明から飛行機で約50分、距離にして約300km余西方に行くと、大理白（ペー）族自治州の州都・大理に到着する。ここは、白族の居住エリアで、彼らの伝統文化が色濃く残っているところである。大理には、昔の中心地である大理古城と新しく造られた行政都市・下関という2つの中心エリアがある。

（1）下関エリア

◆大理白族自治州博物館

大理市下関エリアの西方にある大理白族自治州博物館を訪れた。ここは、非常に寂れていた。観光客はほとんどいない様子で、チケット売りの老人「ようこそ、ようこそ。よくいらっしゃいました。」と言って、異様なほどに歓迎してくれたし、電気は節電のためか、消してあったので、私は自分で一部屋、一部屋電気をつけながら観覧してまわることになった。このように博物館自体は寂れていたが、展示物は結構興味深いものばかりで、かつてこの大理を治めていた南詔国や大理国の歴史、白族の文化や習慣に関する展示物が豊富に取り揃えてあり、大理の歴史や白族の文化に対する理解が深まった。こんなにも充実した場所なのに、観光客がいないというのはあまりにももったいないと感じた。



大理ペー族自治州博物館展示物（民族）↑



大理ペー族自治州博物館展示物（大理石）↑

◆大理市（下関）を歩く

大理の町を歩いて見て回っていると、アメリカの大手スーパーである Wal-Mart を発見した。中に入ってみると、たまたま中秋節のイベントが行われており、民族衣装を着た中年の女性の集団（中年の男性も1人だけいた）が、民族舞踊を何曲も踊っていた。私は、何族の人々が踊っているのか知りたくて、Wal-Mart の店員に聞いてみたところ、「彼女たちは皆が皆同じ民族ではなくて、民族舞踊団の人たちが様々な民族の舞踊を披露しているのですよ。」と教えてくれた。

大理の町では、日本人は1人も見かけなかったし、日本料理店も日本語の看板も全く見られなかった。しかし、意外なことに、韓国料理店や韓国語の看板を多く見かけた。その中のある店の店員は、大理に多く住む白族ではなく、漢族であった。白族自治州の大理市には、日本の企業はまだまだ進出していないが、韓国の企業はかなり進出していることが町を歩きながら、じっくり眺めてみることによってとてもよくわかり、1990年代初めに国交を結んだ中国と韓国の経済的なつながりの強さが垣間見えた。

大理の町を歩いてみて、タクシーやバスを使うのもいいが、歩くことによってしかわからないことがたくさんあるということに気づかされた。Wal-Mart という思わぬところで民族舞踊を見ることができたし、大理への韓国企業の進出などを知ることもできた。また、地図には載っていない様々な場所やものを発見でき、金銭的にも、学習の面においてもすごく得をしたような気持ちになった。



Wal-Mart の中で民族舞踊を踊る人々

◆大理古城

大理市下関エリアからバスで30分ほど北に行くと、かつての中心地大理古城に着く。ここは、かなりの観光化が進んでおり、中国人観光客（大多数は漢民族）と外国人観光客（西洋人が多いが、日本人の大学生を2人だけ見かけた）で賑わっていた。

最初に目にしたのは、古城の南門の前において、伝統衣装を身にまとった白族の若い美人女性たちであった。彼女たちは1枚5元（日本円で約80円）で観光客と一緒に写真に撮る商売をしていたので、私も記念に1枚だけ白族の美人女性たちと一緒に写真を撮った。観光化が進んでいる大理古城には、数多くの土産物店や市場などがずらりと並んでいて、観光客でとても賑わっていた。下関エリアよりも白族の民族衣装を着ている人が多く、中年の女性だけでなく20代の若者たちも多く見受けられた。もちろん彼女たちは観光用に「用意された」白族女性であり、白族と一緒にあるいは民族衣装をきた白族を撮りたがる観光客のために、伝統文化を「展示」している人々である。また、古城では、白族の老女や中年女性たちが観光客に対して、一生懸命物売りをしていた。西洋人向けのバーやカフェが並ぶ洋人街という通りも、そのバーやカフェは西洋人観光客の溜まり場ようになっていた。私もその中のあるカフェで昼食をとったのだが、食事していると、白族の老女がひまわりの種と少数民族のキーホルダーを窓の外から売りに来た。するとカフェの若い女店員がとても強い口調で、「ここで売らないで、あっちに行つて」と言って、白族の老女を追い払っていた。同じ中国人でも、中国の大多数を占める漢族は一少数民族である白族に対して、こんなにも強い口調で追い払ったりするのだと思い、マジョリティとマイノリティの立場の違いを感じた。

古城では、大理市博物館も訪れた。ここには、古城とはうって変わって寂れている感じで、観光客は私を含めて3人くらいだった。また、博物館の従業員は暇そうにして寝ていたが、これにはとても驚いた。今回の研究旅行で博物館を訪れるのは、ここで3回目だが、どの博物館にも観光客はほとんどおらず、寂れているところばかりであった。このことから観光客は、博物館というその国や地域の歴史的・文化的背景にはあまり関心を示さないのではないか、ということが推測される。



大理古城で物売りをする白族の老女↑



大理古城で白族の衣装を着ている若い女性たち↑

◆周城村にて

大理古城からさらに北に 23km 行ったところに周城という白族の村落がある。私はバスでこの村を訪れたのだが、バスを降りたと同時に、商売熱心な白族の中年女性に声をかけられ、「自分の家を見て行け。ろうけつ染めをやっているから！」という。この村は、藍色のろうけつ染めで有名だったので、その女性についていった。彼女の家では、布を藍色に染めてろうけつ染めの民芸品を作っており、また、その場で観光客向けに売っていた。彼女たちは観光客を見つけると、必ず声をかけ、自分の家に連れて行き、ろうけつ染めを売る。こうした観光スタイルで白族は稼ぎ、生活している。また、観光客は村での白族の暮らしぶりを見物し、この土地独特の土産品を見たり買ったりして、楽しむ。この土地に暮らす白族の女性たちは、観光客が自分たちに何を求めているのか、そして、どうしたら自分たちの村に観光客がたくさん訪れるかを知っているかのようにあり、ここにオーセンティシティ（本物志向）の観光客（ゲスト）への、地元の白族（ホスト）側の対応をみる思いだった。



ろうけつ染め作成過程↑

◆喜洲村にて

大理古城の来た 19km、先述の周城村から 4km ほど南に下ったところに、村全体が白族文化を展示する博物館といった風情の喜洲村がある。ここは、周城よりもかなり観光化されており、「严家民居三道茶歌舞表演」という、白族の伝統舞踊を見せる劇場がいくつもがあった。そのうちの1つの劇場に入ると、たくさんのツアー団体客がいて、ツアーバスが次々に入ってくる。中国人（漢族）の団体客がほとんどだが、中には、韓国人、西洋人の観光客も見受けられた。ここの入り口にトイレがあったので、中を見てみると、トイレにはドアがついており、かなり綺麗だった。このことから、この喜洲が観光地化され、外国人も含めて各地からの観光客が訪れることが推測できた。

ここは、チケット1人50元（日本円で約800円）と高いが、三道茶という白族のお茶が三種類飲めて、白族の伝統舞踊が見られ、さらに白族の伝統的の民居建築技術が見学できる。チケット売り場付近には、白族の民族衣装を着た女性が何人もいたが、こんなにも観光客がいるのに、やる気はなく寝ている女性もおり、写真を撮ろうとカメラを向ける観光客にうんざりしている様子で頭を手で覆い隠して、顔をあまり見せないようにしていた。その姿はまるで写真を撮るなどでも言うようだった。



観光化され、綺麗なドア付のトイレ↑



やる気のない白族の女性達↑

白族は客人をもてなすことで有名な民族といわれている。また、大理の温暖な気候はお茶の栽培に適しており、この地は唐代以降、茶の産地となった。そして、白族は客人のもてなしにお茶を使うようになり、やがて茶文化としての三道茶が成立したという。三道茶の様式は「一苦、二甜、三回味」という言葉に集約され、お茶は3度出てくる。一杯目は、苦味の効いたお茶。二杯目は、甘くて、胡桃・乳扇・黒砂糖が入っているお茶。そして、3杯目は、少し苦いお茶であった。このお茶を飲みながら、白族の歌舞劇を見物した。この歌舞劇は、「茶摘みの様子」「カップル成立」「結婚式の様子」など、白族の生活の様子を表したものだ。舞台の上には電子掲示板があり、流れている歌の歌詞の字幕があり、韓国語、英語、日本語の3カ国語で表示されていた。3カ国語の字幕がついているところは珍しく、相当観光化されている証拠だと思った。



三道茶↑



韓国語・英語・日本語字幕↑



白族の歌舞の様子↑

5. タイ族の町と村を歩く～西双版纳タイ族自治州～

大理から飛行機に乗り約50分、タイ族自治州の州都・景洪(西双版纳)に着く。ここでは省都・景洪を拠点にタイ族が多く住む周辺の県や村を訪問し、タイ族の文化を見てまわった。

◆勐海県景真村と景真寺

景洪からバスに乗り1時間ほど西方に走ると勐海県の中心都市・勐海に着く。ここでバスを降り、小型のバンに乗り換えて30分ほど走り、タイ族村落の景真村に着いた。

このタイ族の村には観光客は誰もおらず、とても静かなところだった。村の中にある景真寺というタイ族の寺院には 17 人の僧侶がおり、1 人だけタイ語が話せる若い僧侶がいた。彼は、タイの寺院で修行をした経験があるのだという。ここは、私が中学生のときに訪れたことのあるタイの雰囲気を感じられ、しばし中国にいることを忘れたほどだった。ただタイとは違うところは、この寺院のタイ族の僧侶たちは、とても「ゆるい」雰囲気をかもしだしていることだった。特に、私が訪問した前日にあった村の祭りの片付けのために寺の掃除をしていた少年僧たちの掃除の様子はかなりいい加減で、バケツを蹴飛ばしたり、落ちていた木の実を蹴飛ばしていたりしていた。また、この寺院のほかの場所でも、私がみかけた中国のタイ族の僧侶たちは、バイクに乗ったり、タバコを吸ったりしていて、とても驚かされた。このような光景は、タイでは決して見ることができないものと思った。

景真寺を後にして、景真村の中を散策しながら、タイ族の村や彼らの生活ぶりを観察した。昔ながらのタイ族の家造りの家がほとんどであり、屋根は本場タイ北部でみられる「ガラレ様式」で高床式の家だったが、中には形や色使いが一定で、とても新しい同じ家々も何軒か並んでいた。



景真寺八角亭↑



掃除をする僧たち↑

◆ガンランパー地区・「西双版纳タイ族園」

景洪市からバスで 1 時間ほど南東に下ったところに、ガンランパー地区はある。「ここを訪れなければ、西双版纳タイ族自治州を訪れたことにならない」といわれるほど、タイ族文化が息づいている町である。この人たちは、ほとんど皆タイ族であるが、東南アジアのタイで話されているタイ語とは違う、タイ語を話す人々である。ここでは、「タイ族文化園」を訪問し、最初に寺院を見学した。ここには、東南アジアのタイからやって来たタイ人観光客をたくさん見かけた。彼らは自分たちと関係の深いタイ族文化を見学しに来ていた。ほかにも中国人（漢族）、韓国人、西洋人のツアー団体客がたくさんいて、観光化された場所であることを強く感じさせられた。ここでは、鶏を戦わせて勝負を争う闘鶏が行われていた。「タイ族文化園」のトイレは、新しく建てられてい

て、ドア付の綺麗な水洗トイレに変わっていたことが、観光化の裏づけとなっている。

ここでは、毎日午後3時から、タイ正月を祝う4月に行われる「水かけ祭り」(ソンクラーン)のショーが実演されており、観光客もお金を払って貸し出しの民族衣装を身にまとい、この水かけ祭りに参加できるようになっていた。これに参加している観光客は、私の見たところ韓国人の中年女性のツアー客が多かった。こうしたイベントに見られるように、ホスト社会(タイ族)はゲスト(観光客)が求めていることやゲストが喜ぶことを察知して工夫を重ね、様々なイベントやシステムを考案し、自分たちの(伝統)文化を表象するものを選び出して、観光客に提示していることが分かった。水かけ祭りは本来の物とは大きく違っていた。タイ族の人々は観光客が喜ぶように、パフォーマンスを加えたり、音楽を鳴らしたりして、自分たちの本当の文化を大きく変容させて観光客に提示していたのである。それに対して、観光客は何の違和感も憶えず、単純に喜び、楽しんでいた。ゲスト側としては、タイ族の本物の文化を見ることを目的としてここに来ているのではなく、本物の文化の一部に触れ、楽しめさえすればそれでいいと思っているようであった。



水かけ祭りの偽造パフォーマンス↑



水かけ祭りに参加した韓国人観光客↑

◆景洪(西双版纳)を歩く

『地球の歩き方』(2004~5年度版)には、タイ族をはじめ、景洪(西双版纳)に居住する少数民族の文化を野外展示する「民族風情園」が記載されていたが、同書の(2006~7年度版)には、これが記載されていなかった。このことを不思議に思い、ここを訪れてみることにした。「民族風情園」自体は存在していたが、「少数民族文化の展示」機能はなくなっており、ただの公園になっていた。中に入ると、以前のような少数民族様式の家屋はほとんどなく、民族の文化や生活を見ることはできなかった。少数民族の文化や生活を残す動きはここでは見られなくなったようで、2007年に少数民族の展示はなくなったようだ。また、今は使用されなくなった民族舞踊のステージと会場が残っていた。結構広くて、おそらく1000人ほどの収容スペースがあった。

次に、景洪市内で最も大きな曼聽公園を訪れた。入園料40元(日本円で約640円と高い!)を払い中に入ると、この公園はとても綺麗に整備されており広かった。ただ、観光客はさほど多くはなかった。元首相だった周恩来の記念像や展示物が公園入り口正

面に建てられており、公園内を歩くと仏教寺院や仏塔があり、一部タイ族の民族舞踊も行われていた。タイ族の土産物店もあり、観光化は、中途半端に進んでいるといった印象をもった。なんとと言っても、周恩来の銅像が公園正面にデーンと建っている様を見たとき、少数民族居住地区であったこの地域が、中華人民共和国という近代の共産主義国家に組み込まれているプロセスに思いを馳せることになった。



西双版纳に周恩来がやってきた時の記念すべき像↑



タイ族のショー↑

6. おわりに

今回、中国雲南省の少数民族文化を観察するために、昆明、大理、景洪(西双版纳)の3つの都市とその近郊村落を訪れて、観光客を迎えるホスト社会の観光客(ゲスト)に対する少数民族文化の表象やエスニック・ツーリズム(民族観光)における少数民族文化の変容・再生の動きなどを様々な角度から見ることができ、本当に充実した研究旅行となった。観光客を受け入れる立場であるホスト社会は、ゲストである観光客に自分たちの本物(オーセンティックな)の文化を見せているというよりも、D.ブーアスティンの擬似イベント論のように、実際の伝統文化に即して作り出された擬似文化を観光客に提示することで彼らを喜ばせているという傾向が見られた。ゲストである観光客も、それなりにではあるが擬似イベントに満足しているようであったし、実際に私も、切り取られて作り出された「文化」に面白さや楽しさを感じていた。しかし、それと同時にゲストである観光客は、私も含めてであるがD.マッカネルのいう「オーセンティシティ」(真正性)を求めている、といった側面がある。観光客は擬似イベントで一定の満足を得る傾向にはあるが、一方で、本物や実物を志向する存在でもあると思う。切り取られ、演出されながら、作り出された文化に対して、失望をあらわにする観光客も少なくない。エスニック・ツーリズムの隆盛は、ホスト社会にゲスト(観光客)の志向(思考、嗜好)に合わせた文化表象の選択や文化の提示・展示をもたらしてきた。グローバル化やトランスナショナリズムの進行する現代世界の文化のダイナミズムが、このようにして作り出されているということ、今回の研究旅行で肌で感じることができ、大学の授業で学んだことを追体験できたことは、私にとってかけがえのない経験となった。今回、実際に現地に赴き、自分の眼で見、自分自身で体験をすることの大切さに気づかされたが、こうした研究旅行の機会を与えた下さった国際文化学部の諸先生方と研究旅行奨励制度に、本当に感謝致します。

研究旅行要旨

今回の研究旅行は、10泊11日で中国の雲南省（昆明、大理、景洪）を訪れ、少数民族文化のダイナミズムに関する基礎的研究を行った。研究旅行の要旨は以下の通りである。

昆明では、「雲南民族博物館」、「雲南民族村」において、「雲南省における少数民族文化とツーリズム」の概況を把握し、少数民族文化の観光客に対する提示のされ方を観察した。また、昆明市内の町並みや人間を観察し、「円通禅寺」、「雲南師範大学」、「雲南大学」で、画像資料の収集を行った。

大理では、「大理白(ペー)族自治州博物館」、「周城の白(ペー)族村落」、「喜洲の白(ペー)族村落」を訪問したり、大理市北部の大理古城を散策したりして、白族文化が観光客にどのように提示されているかを観察した。また、古城内の「大理市博物館」を訪問・見学した。また、大理市内を散策し、「大理駅」、「洱海公園」を訪問した。

景洪では、タイ族の景真村と景真寺を訪問し、景真寺ではタイ族僧侶に聞き取り調査を実施したり、勐海でタイ族の生活を見学した。また、「西双版纳タイ族園」では、タイ族の文化が観光客に対してどのように提示されているかについて観察した。景洪市内の「民族風情園」、「曼听公園」も訪れ、ここでの少数民族文化の提示のされ方を観察した。